

# ユニテ 2022.7

49

*BONNE ANNEE!*

迎春 平和

2008年 元旦

第266回<読書会例会>  
1月26日(土) 午後2時~4時  
小説「クレランポー」 第3部

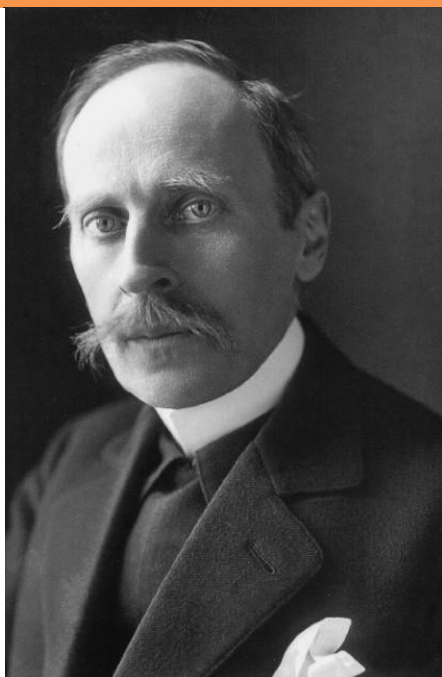
第一次世界大戦下のロランの反戦思想を具現。  
会費 500円(賛助会員無料)  
例会は毎月第4土曜日です。夏期休暇あり、

**予告** \*朗読会 3月8日(土) 親子で語る  
「ジャン・クリストフ物語」—会員たちによる—  
場所 関西日仏学館

\* 国際平和ロマン・ロラン シンポジウム  
2008年10月3日~6日  
場所 世界遺産ヴェズレー、クラムシー  
タワー参加者募集!

今年もよろしくお願ひいたします。  
〒606-8407 京都市左京区銀閣寺前町 32 番地  
(財)ロマン・ロラン研究所  
TEL・FAX (075) 771-3281

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>  
E-mail [rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp](mailto:rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp)



一般財団法人  
ロマン・ロラン研究所

**表紙左** 読書会のお知らせとイベントを予告した2008年の年賀状。ロマン・ロラン研究所の読書会は、2022年4月で385回（友の会から数えると560回）を迎えた。

## 目次

パンデミックに生きる——募集文掲載	1
「財団法人 ロマン・ロラン研究所設立五〇周年」に想う	2
パンデミック発生以降の日常と読書	4
断捨離をめぐる考察	7
呼びかける者——俳優・宝田明とロマン・ロラン	9
イギリス折々	13
家族や友人に支えられて	15
古民家暮らし	18
ロマン・ロランとポール・デュパン——音楽家、魂の協奏	21
ロランの時空と生なるコモンズ	34
ロマン・ロランの会に役立ててもらおう	36
財団法人ロマン・ロラン研究所設立五〇周年記念 〈朗読と音楽〉のマチネに出演させて頂いて	37

村田 まち子

37

井上 幸子

36

濱田 陽

34

植松 晃一

21

能田 由紀子

18

久保 久子

15

長谷川 治清

13

安木 由美子

9

山下 雅子

7

黒柳 大造

4

松田 有美子

2



「コロナ禍、いかがお過ごしですか」を問いかけ「テーマ、字数は自由にお書きください」とお願いしたところ、次の方々からパンデミックに生きる貴重な証言をいただきました。昨年は財団設立五〇年の節目の年でした。その記念の催しも、友の会時代から続けられてきた読書会も中止や延期を余儀なくさせられました。ようやく感染者数の改善の兆しが見えたものの、いまだ収束していません。当研究所の小さな存在へ「共感」の眼差しを変わらず投げかけてくださる方がいる限り、「ユニテ」と命名された本誌の真髄に今こそ思いを馳せるべきではないかと、と繋がり、響きあう声が、この誌上に木霊し、希望となつてその一片が皆さまの手のひらに落ちますように！

新種ウイルスが世界を席卷して地球上の人々の生活を一変させると誰が予測したでしょうか。日常性を喪失したその激変のエポックに私たちは生きています。そしてまた最近では、世界を震撼させる核にまで言及する暴挙を阻止できないロシアのウクライナ侵攻。愚かさに悲憤し「ウクライナ軍事侵攻反対の声明文」をホームページ上に掲載、同文は本号にも載せさせていただきました。

今後は設立の趣旨である反戦・平和、人類愛に基づいた人権擁護に加えて、地球・気候変動に関する環境、持続可能な社会問題に、私どもは取り組んでまいるつもりです。哲学の道の麓に位置する昔の古い木造家屋が醸し出す平穏・静謐のなかで、一服のお茶とともに皆さまのお力をいただきながら、ラン活動の交流の場であり続けたいと祈念する次第です。なお、以下の募集文は到着順に掲載いたしました。(編集部)

## 「財団法人 ロマン・ロラン 研究所設立五〇周年」に想う

松田 有美子

「ロランの思想を恒久化するため」と、その生涯を

かけてロランの作品を翻訳し紹介し続けた宮本正清先生が設立されたこの財団が二〇二一年、設立五〇周年を迎えた。

宮本先生をはじめ、先生の遺志を引き継いで活動を続けてこられた研究所の方々のこの五〇年にもわたる地道で精力的な活動を想う時、心からの敬意を持つと共に、この「五〇年」という時の長さや重さに圧倒される。

これらの財団の活動によって、私たちロランのファンは、どれだけたくさんの素晴らしい時間を頂いたことか。秀れた演奏家による音楽会や朗読会、また、各方面の先生方の講演などによって、いろんな角度からロランの作品や人柄、そして思想、また文学上の功績など、本当に

沢山のことを学ばせてもらった。

また、長年にわたって続けられている「読書会」では、ロランの作品を皆で読むことの楽しさ、イキイキと描かれる多種多様な登場人物、彼らの豊かで意味深い会話の中から、時にはかくも長き自らの人生を重ね、音楽が溢れ出る情景の描写など、読んでいて思わず胸が熱くなることも度々である。

私をはじめとしてロランの作品に出会ったのはもう半世紀以上前のことである。

まさに「寝食を忘れて」夢中で読み耽った若かった頃を、ついこの間のことのように思い出す。

どれだけ深く理解していたかは全くわからないが、し

かし、その時の感動は、その後の私の読書に対する想いを決定的にしたように思う。

今、私たちが想像もしなかった様々な苦難が世界中の人々を巻き込んで我々を襲ってきている。

財団ではこの五〇周年を記念して二つの大きな催しが企画されていた。しかし、コロナ禍で人数制限や延期を余儀なくされている。私は、一日も早いコロナの収束の兆しと共に延期になったこの催しが早く開催され、沢山の人がここに足を運んで下さることを願わずにはいられない。これらの素晴らしい催しを通して、さらに一人でも多くの方々にロマン・ロランというフランスの作家の名を知ってもらい、今こそ、ロランのヒューマニズムの精神、平和主義、反戦・友愛の思想が世界中の人々に届き、特に若い世代に知ってもらい引き継がれていくことを心から願い、期待している。

そして、私自身もまた、読書会などにも参加し続け、メンバーの方々にも学びながら、歳を重ねてなお豊かに生きて行く努力を重ねていきたい、とこの「財団設立五〇周年」に改めて思う。

## パンデミック発生以降の日常と読書

黒柳大造

なっているなと感じています。

コロナ感染問題が始まって以降は、生活必需品の買い物などを除けばほぼ外出しない生活を送っています。自宅が農村部にあり周囲を畑や雑木林で囲まれている環境

ロマン・ロラン関連で最近読んだ本を三冊紹介します。

なので、幸いなことに外出時以外はマスク無しで生活できています。仕事は月一、二回の出勤を除けば在宅での

① 『みなみ風 (No.1)』 (南風図書館・二〇二二年)

リモートワーク中心です。仕事外では、これまでのように読書・文学研究関係の活動で東京や京都を訪問する機会

② 『ブルーストの美』 (真屋和子・著・法政大学出版社・二〇一八年)

会がなくなり、残念に思っております。なお、読書やこれまでも続けてきたトルストイや小泉八雲等についての

二〇一八年)

サークル会誌の原稿執筆は、在宅でも支障がないので継続しています。読書や文章執筆は自宅でもできるので、

③ 『高田博厚Ⅱロマン・ロラン往復書簡 回想録』 (分水嶺 補遺) (高田博厚・著・吉夏社・二〇二一年)

閉塞的な環境下で充実した生活を送るための強い支えに

①は鹿児島県鹿屋市にある南風図書館が発行するブックレットです。毎号一人ずつ作家を特集していて、No.1

ではロランが選ばれています。①に掲載されたインタビュー

ビューで館長の郷原茂樹氏は、同氏が一九六〇年代半ばの二〇歳代だった頃に、東京にあったロマン・ロラン協

閉塞的な環境下で充実した生活を送るための強い支えに

の二〇歳代だった頃に、東京にあったロマン・ロラン協

閉塞的な環境下で充実した生活を送るための強い支えに

の二〇歳代だった頃に、東京にあったロマン・ロラン協

閉塞的な環境下で充実した生活を送るための強い支えに

の二〇歳代だった頃に、東京にあったロマン・ロラン協

閉塞的な環境下で充実した生活を送るための強い支えに

の二〇歳代だった頃に、東京にあったロマン・ロラン協



会の会員であったと話しています。当時、多くの人々が市井の読書会でロランに親しんでいた様子が伝わってきます。私は、市井の読書会という観点で、ロマン・ロラン研究所の読書会にも通じるところがあり興味深いなど感じました。なお、同書にはロマン・ロラン研究所の西成理事長も寄稿しています。また、前出のロマン・ロラン協会の会誌『ロマン・ロラン研究』は、ロマン・ロラン研究所の書庫にもバックナンバーが所蔵されていますので、興味のある方は閲覧可能か相談してみてもいいかでしょうか？

②はフランスの作家・プルーストに関する研究書です。同書第五章「プルーストとベートーヴェン」にはプルーストとロランが音楽、とくにベートーヴェンに深く傾倒したことが記されています。そして、プルーストにはロラン批判の文章（断章）があるものの、その文章はロランのベートーヴェン論が完結する前に記されたものであり、音楽、とくにベートーヴェンの受容において両者が相容れなかったと言いつけることはできないという見解が述べられています。同書とはやや視点が異なりますが、

私は、プルーストとロランを比較した場合、プルーストは代表作『失われた時を求めて』において架空の作曲家・ヴァントウイユの楽曲を登場させ、ロランは『ジャン・クリストフ』において主人公である架空の作曲家・クリストフを創造することによって、それぞれの作品において「作者自身の音楽」に重要な役割を担わせているところが共通していて興味深いと感じました。

③は彫刻家・高田博厚氏とロランとの間で交わされた往復書簡集です。一九三一～四四年の手紙が収録されています。高田氏は戦前から高村光太郎等と芸術のみならずロランを介して親交があり、渡仏中の一九三一年にはロランを訪問しています。また、戦後、日本では、宮本正清氏、片山敏彦氏等と共に「日本ロマン・ロランの友の会」を創設したメンバーの一人でもありました。ロラン作品の翻訳やロランに関する随筆も多数発表しています。同書と『分水嶺』をはじめとする高田氏の著書を併せて読むと、日本におけるロラン受容初期の雰囲気の一側面を感じることができます。

また、最近では、ロマン・ロラン研究所と関係の深かつ

た加藤周一先生に関する研究書もいろいろ出版されています。今後は加藤先生の著書を再読するとともに、それらの研究書も少しずつ読み進めていきたいと思っております。

## 断捨離をめぐる考察

山下 雅子

物で溢れた暮らしの断捨離をやっと始めた。新品のまま古びてしまった物も少なくない。身の丈に合わないものをお蔵保存していても仕方がない、という当たり前のことを実感している。

俳句という定型詩は人間の感情を断捨離する文学ツールであるらしい。人は生きていく中で持て余すような感情を経験することがある。それを定型の中に嵌め込み、美的エッセンスだけを残し不要なネガティブ感情を切り捨てる。それが文学的断捨離訓練になるのだそうだ。なるほど。外出が難しいコロナ禍時代の中で、定型詩の表現法が世界各地で見直されているらしい。羊羹の端を切り捨て、整形していく作業に近いのだろう。しかし「端っ

このほうが美味しい」と言って、切り落としを好む人も少なくない。私もそのタイプなのだ。だから多分、断捨離はうまくいかない。そんなコロナ第六波の春を迎えている。

物品の断捨離と一緒にしてはいけないことだが、社会体制の中で弱い立場の人たちが切り捨てられることがある。為政者が最もしてはいけないことだ。

今年のアカデミー賞国際長編映画賞を受賞した濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』を鑑賞した。車窓を流れる風光明媚な映像は美しく、登場人物たちの心象風景は複雑で切ないものだった。村上春樹さんの原作は人間関係の喪失に苦しむ主人公が、断捨離できない感情を

封印から解いて対面する物語。劇中劇として使用されていたチエーホフの『ワーニャ伯父さん』に迫力があつた。古典名作の存在感に敬服させられた。人の悲しみはいつの時代も同じなのだ。民族の違いも関係ない。ロシア文学の力量は濃厚である。あれだけの普遍文学を生み出した風土なのだから、愚かな方向へは行かないでほしい。ロランがトルストイと交流していたこと、を思い出す機会となった。

そんなことを考えていた四月下旬頃、新聞記事に指揮者・阿部加奈子さんの読書歴が掲載されていた。「生涯の一冊、を選べと言われれば、迷わず『ジャン・クリストフ』と答えます」という歯切れの良い回答に好感を持った。音楽家を目指し始めた中学生の頃から何度も読み返しているとのこと。「共存への希望を見いだす営みを諦めてはいけない、と自らを奮い立たせている」のだそうだ。「共存への希望」。古くて新しいこの課題をこれからの国際社会は成し遂げていくのだと信じたい。

## 呼びかける者

— 俳優・宝田明とロマン・ロラン

安 木 由美子

二〇二二年三月十四日、俳優・宝田明さんの訃報が届いた。数日前まで取材を受けるなど仕事をしていらした中での急逝だった。私は昨年一月に刊行された宝田さんの著書『送別歌』（ユニコ舎）の構成を担当した御縁もあり、まだまだご活躍されると思っていたのでまさかとの驚きが隠せなかった。意欲的に今年の活動計画も練っておられたとも聞いた。

『送別歌』の制作にあたり、二〇二〇年の夏には数回にわたって宝田さんの事務所を訪問してお話をうかがった。七月、事務所のある京浜東北線王子駅では、ホームから見える飛鳥山公園に緑があふれていた。コロナ禍からはじめての夏は、耳に届く蝉の声がマスクをひときわ息

苦しく感じさせた。

『送別歌』は宝田明の半生記であり、不戦不争の思いを綴った本である。十一歳のときに満州で太平洋戦争の終結を迎え、引揚者として戦後を生きた宝田さんは、華々しい映画スターという肖像の奥に、引揚者ならではの胆力と多民族が入り乱れていた大陸育ちのおおらかさをあわせ持っていた。題号の「送別歌」とは、宝田さんが高校生の際に引揚船で満州を離れた日を懐古し、別れの悲しみと再会を願う思いを込めて詠んだ漢詩の題名である。晩年は不戦不争を訴える活動に取り組んでいた。一九六〇年代生まれの私にとって、宝田さんが涙をこらえながら語る敗戦後の満州での体験は衝撃であり、これはき

ちんと記録して伝えなければ、と映画スターの半生記だけでは無い本になると覚悟を決めたのだった。平和についてまっすぐに述べられた言葉は印象的であった。

平和は一国だけではつくれません。満州でコスモポリタンに育ち、戦後、日本に入ってきた外国映画によって異文化を知った私は、それぞれの民族には文化があり、共存し、助け合うことで平和はつくることができるかと肌で感じています（『送別歌』より）

この本がきっかけとなって、二〇二二年二月十二日にはユニコ舎より『境界 BORDER vol.1』という戦争体験者による手記集を刊行した。もはや日本の人口の三分の二は戦後生まれである。今、聞いておかなければ彼らの体験や思いは失われてしまう…、そんな焦燥感にも似た思いに駆られた私たちは、普通の人たちが戦争を、戦後をどう生きたか、今、何を思うのかを聞き取り、一種の「生活史」として記録しておこうと考えた。『境界 BORDER』という題号は戦争に始まりと終わりは存在

するのか、国、民族の境界はあるのか、さまざまな境界を問う意味が込められている。「戦争は終わっていない」と語る体験者の声は重い。この本の題字はコンセプトに共感した宝田さんが書いてくださった。

vol.1ではシベリア抑留、満蒙開拓団、台湾人兵士、少年飛行兵、商船乗組員、葛根廟事件、東京空襲についての八人の手記となった。言えないこと、どうしても伝えたいこと、さまざまな思いを胸に言葉を選び、記憶をたどって語られることの中には、ささやかな喜びもあれば、その瞳に涙を浮かべ言葉に詰まる凄惨な体験もあった。

取材に応じてくださった皆さんは、敵を憎むのではなく戦争を憎み、戦いを決して繰り返してはいけない、自分と同じ思いを二度と誰にもさせたくないと一様に語った。戦禍を生き延びた皆さんの思いは同じだった。現在は『境界 BORDER vol.2』の制作に入っている。

一九一四年九月、ロマン・ロランは第一次世界大戦勃発を受け、「戦いを超えて」という文章を発表して世界

へ友愛を呼びかけた。一九一二年に書き上げていたジャン・クリストフという人物を伴侶にしてロランは国を超えて、民族を超えて平和を訴えたように思う。理解と無理解、愛と憎しみ。ロランは自身が晒されている世界の目に惑わされることなく、戦いではなく平和を呼びかけ続けた。

一九三一年の日付で全集のために『ジャン・クリストフ』に添えられた緒言において、ロランはこうつづつてゐる。

……ジャン・クリストフはもはやいづれの国においても他国人ではないということである。あらゆる遠隔地方から、あらゆる異民族から、シナから、日本から、インドから、アメリカ諸国から、ヨーロッパのあらゆる民衆から、多くの人々が私のもとへ言いに来た。『ジャン・クリストフ』は私たちのものだ。彼は私のものだ。彼は私の兄弟だ。彼は私だ……」

(『ジャン・クリストフ』四 岩波文庫より)

二〇二二年二月二十四日、ロシアによるウクライナ侵攻が開始された今、繰り返される戦いの世界にロマン・ロランの呼びかけはまったく古びることがない。

私は横浜で草徑庵という小さなブックカフェを週末だけ営んでいる。みず書房の「ロマン・ロラン全集」とロマン・ロラン研究所の「ユニテ」は店の顔である。ロマン・ロランという名を見つけて「懐かしい」と目を細めて本棚に近寄る方もあれば、「ロマン・ロランって有名なんですか」とあっけらかんと尋ねる若い人もいる。どちらにしても会話のきっかけを生み出してくれていることは確かである。十年間、ロマン・ロランは草徑庵の本棚を静かに支えてくれている。

ロランは『ジャン・クリストフ』創作の当初、以下のように記したと先の緒言に書いている。

人類の一致、それがいかなる多様な形態のもとに現れようとも、常にそれを示すこと。それこそ、科学のそれと同様に芸術の第一の目標でなければならな

い。それがジャン・クリストフの目標である。

(『ジャン・クリストフ』四 岩波文庫より)

草徑庵では、この春もまた新たに『ジャン・クリストフ』に出会い、読み始めた人がいる。呼びかける者の声に耳を澄ます人はいつでも、どこでもいるのだ……そう信じた。

#### 文献

「戦いを超えて」宮本正清訳『ロマン・ロラン全集』第一八巻  
みすず書房 一九八二年

『ジャン・クリストフ』豊島与志雄訳 岩波文庫 一九八六年

『新村猛著作集 第一巻ロマン・ロラン』三二書房 一九九三年



## イギリス折々

長谷川 治 清

いよいよイギリスにも春がやってきた。庭の水仙もあ

ちこちで咲き、サクラや椿も咲きだした。待ちに待った

春である。しかし、テレビのニュースはウクライナの報

道で埋まっている。平和な世界に慣らされてきた私たち

は、一瞬の間に、昔の戦争時代に逆戻りしたようである。

日々のコロナの報道は画面から消えてしまったが、感染

者・犠牲者はこれまでになく増大している。しかし、規

制は全面的に解除され、マスクをしている人も殆どいな

くなった。このようなコロナとウクライナの現実は、結

局、人類が進歩していないことを端的に反映しているよ

うである。自然の美しさとロランの心に想いを馳せなが

ら、それとは対照的な人類の愚かさを俳句に託すもので

ある。

冬小雨

小枝キラキラ

雫の絵

(白妙桜の枝は絵のように美しい雫の樹形を見せている)

プーチンや

爆撃続く

春の夜に

(非人道な爆撃を続けるプーチンは国際的、人道的にその責  
任を負うべきである)

ウクライナ

地球のいずこ

おぼろ月

(広い宇宙の中の小さい地球上でのなんと微細な争い！人類の愚かさを如実に示すプーチン)

白椿

コロナ厭わず

咲き誇る

(コロナの感染者は依然減少せず、三月二二日の感染者は九万五〇九八人、犠牲者は二五〇人である)

春の日に

更なる接種

わが旅路

(人生の旅路、その最後を生きるためブースタ接種を求めて人々が集っている)

赤椿

一輪咲きて

朝のティー

(朝のティーを味わいながら、咲き始めた一輪の赤椿を楽しんでる)

注：二〇二二年四月五日稿。これらの俳句は同年二月二八日から三月二五日。

(イギリス・シェフィールド在住)

## 家族や友人に支えられて

久保 久子

「コロナ禍で自分はどうかしたか」というのが与えられたテーマですので、私事で大変恐縮ですが、私がかの間遭遇したことを記させていただきます。

私は二〇一九年十月に風邪をこじらせ急に歩けなくなり、しばらく入院していました。退院後、介護保険の対象となり、地域のデイケアセンターで週一回機能訓練を受けていました。ところが二年一月そのセンターの職員が一人がコロナに感染され、「しばらくセンターを閉鎖する」との連絡が入りました。「私たち通所の者もPCR検査を受けられないのか」尋ねましたが、「職員だけです」と。翌日保健所にも問い合わせましたが同じ返事でした。我が家は夫と娘との三人家族ですが、私自身

感染していないとは言いい切れません。というのは、当の職員の方とは、連絡のあった日中も度々話をし、訓練機器の使い方も教えてもらっていました。私は、いわゆる濃厚接触者の一人でもあります。家族に万一のことがあつてはならないので、気管の弱い夫はさまざま山間の村で過ごすことにし、私も娘と接触しないように、食事も別の部屋で摂るようにしました。PCR検査を受けられていたら、この不安な日々を送ることもなかったのですが。またいつセンターで感染者が出るかわからないので、すぐにセンターに通うことをやめました。

家の裏には小さな畑があります。ちようど一年前の四月の夕方、そこに取り付けている野良猫除けの網に足を

ひっかけてしまいました。その時は急いでいたので、勢いよくスチール製の納屋に体をぶっつけてしまいました。右手の上腕を骨折しました。当初は、入院によってコロ

ナに感染しないか心配でしたので、通院で治療をしていました。しかし、なかなか良くならず、五月末に入院・手術を受けました。骨折以来、腕を三角巾で固定していましたので、入院中は、肘から直角に曲がった腕を、少しでも動かせるように、そのための訓練が中心でした。しかし、入院の日が経つにつれ、「家族や親しい友人と直接会いたい、話したり食事をしたい」という想いが募ってきました。家族が洗濯物の交換で、病院の階下に来てくれていても会えません。そこで、病院と道路を隔てて街路樹が茂っているのですが、六階の病室から互いの顔が見える場所を探して、手を振りあうようにしました。ほんの二、三分のことですが、何よりの楽しみでした。友人からは電話や手紙をよくもらいました。家族はまた、交換ノートに毎回、何かしら書いてくれましたので、私も返事を書くようにしました。これまで字を書いたことのない左手で、まず練習し、少しずつ

つ右手でも書くようにしました。退院時には、右指もかなり動かせるようになり、読みづらいながらも書けるようになりました。

六月末に退院しましたが、一か月ほどは「疲れた」「熱がある」と言っては、一日の大半を横になって過ごし、りさまでした。体重は入院前より五〜六キロ痩せていました。杖をついて歩こうにも、体がフラフラし足が地に着いている感覚がありません。この頃が、健康を取り戻せるかどうかの分かれ目だったと思います。疲れや痛みから「逃げるな」と自分に言いよせ、起きて少しでも歩くようにし、食事もあり気がすまなくても食べるようにしました。すると、いつの間にか少しずつ、元氣を取りもどしてました。

腕のリハビリは、退院後も週一回受けていました。しかし、そのリハビリだけでは、なかなか腕の動きは良くなりません。そこで、指で筆を持てるようにし、縦や横に大きく腕を動かしたり、字を書いたりしていききました。それと、なるべく毎夜、十分から十五分間の体操を始めました。まずは呼吸の仕方、肩甲骨を回す、腕を遠くま

で伸ばすなどなど、身体のいろんな部分の動かし方を娘が教えてくれました。腕を動かすごとにまだ痛みは走りますが、体操は今も続けています。

先日三か月ごとの診察で、医師が私の腕の動きを見て、「久保さんの年齢だと、自分で顔を洗え髪を梳かせるようになれば良い方です。両腕が同じように動かせることは相当頑張ったんですね」と言われました。何も特別なこととはしていません。「できるだけ毎日本体を動かす、積極的に食べる」といった、ごく普通のことを続けてきただけですが、それに体が応えてくれたのだと思います。

ただ気をつけたのは、高齢者がよく口にする「年だから駄目だ」とか「年をとると情けないね」といった、若い時と比べた言い方でなく、気持ちが前向きになるような言葉を使うように心がけました。それと、入院中はいわゆる「おしゃべり」をすることがなかったたので、たわいないことでも家族や友人とよく話をするようにしました。「しゃべり笑いあう」ことで気持ちが通い、なにより気分転換になります。

こうして自らのことを振り返ってみると、このコロナ

禍の期間に、一人暮らしの友人たちが、不要不急という言葉でこの二年間自粛を余儀なくさせられてきました。地域も、恒例の体育祭、地藏盆、その他いろいろな催し事、趣味の会さえも開けなくなり、萎縮してきてるように思えます。直接人と話す機会もなくなった高齢者にとっては苛酷すぎます。ストレスがたまると、だんだん声も出にくくなる、食事さえもつくるのが面倒になる、持病が進行していく方など。親しかった友人が、「またお会いしましょう」の約束も果たせないまま、この冬の寒さも影響してか、突然に亡くなっておられました。大雪の日のことです。

この三月になって、新たな変異株が出てきて、次第に感染者も増加しているようです。家に閉じこもる高齢者が増えていくかもしれません。直接会えなくても、せめて電話で様子を聞いたりして、お互い気持ちを通わせ励ましあって、コロナ禍を乗り切りたいものです。

## 古民家暮らし

能田 由紀子

六年前に大学時代から長く暮らした京都を離れて、遠く離れた房総半島に移り住みました。二〇代後半のころから古民家に住みたいと思っていたので、千葉県に移ることになった時に、昭和元年ごろに建てられた農家に住むことにしました。それまでの京都での暮らしとは大きく違った田舎の古民家の暮らしについて少しお話しします。

古民家の暮らしは広くて開放的というのが一番の特徴です。京都にいたころは二間ほどの小さな家に住んでいました。ところが田舎では広さにほとんど価値はなく、広い敷地は草刈りやメンテナンスが大変、というマイナス要因です。このあたりの古くからある家の敷地はたい

てい千坪ほどで、家屋はかつての藁屋根の上に銅板で葺いた大きな屋根（お寺の屋根を簡素にしたものを想像していただけるとわかりやすい）の下に襖で仕切っただけの広い部屋がいくつも続いています。部屋はぐるりと廊下に囲まれていて、部屋と廊下との間は障子、廊下の外側はすべてガラスの入った木製の引き戸で、その外に雨戸があるという形です。ふすまも障子も引き戸も開け放つと数本の柱以外は何もない広い空間が出現して、家全体が外とそのままつながってしまうのです。畳に寝転がると、庭と敷地を取り囲む屋敷森が見えるだけで、春から秋まで開け放した空間では部屋の中を風がぬけて心まで解き放たれます。しかし、よいことばかりではありません。

木製の古い引き戸も障子も柱もいたるところが歪んでるので、引き戸をきちんと閉めても隙間だらけです。住み始めたころに横殴りの雨が降ると引き戸を閉めていても廊下が水浸しになるのは参りました（木製の雨戸は三〇枚近くあるうえにガタついて途中で引っかかりするのので閉めるのが一仕事で、台風など引き戸のガラスが割れてしまう可能性があるとき以外は閉めません）。窓を閉めていても雨が降り出すと家の中に雨のおいがあるので、すぐにわかります。冬になって外が氷点下近くまで下がると、廊下では息が白く、部屋の中でも隙間風のせいで極めて寒く、暖房のない部屋では厚着が必須です。しかし、春になって廊下の引き戸を開け放つと、鳥の鳴き声とともに爽やかな風が吹き込み、部屋の中はまた森の中で昼寝をしているような心地よさで満たされるのです。

隙間だらけの広い部屋を暖めるには石油ストーブではどうにもならないので、薪ストーブを入れました。床に直接ストーブを置くと床が傷むのでこれを防ぎ、蓄熱するために、三五〇キロのレンガで炉台を作りました。冬になると毎日二〇キロ以上の薪を燃やす必要があります。

す。しかし、買うと高いので、近所で倒木があると自分たちでチェーンソーを使って切って運び、斧で割って薪棚で一年乾かします。秋から春の週末はほとんど薪を作るために働いていのではないかとおもいます。暖房するだけにそんな労力をかけるなんて信じられないかもしれませんが、実際に秋が深まってくると早くストーブを焚きたくて仕方がなくなりません。最初のマツチ一本が燃え始めのちろちろした赤い炎になり、絶えず形を変えて揺らぐ大きい橙色の大きな炎をへて青味がかつたオーロラのような緩やかな炎になるまで、つい飽きずに見つめてしまいます。また、ストーブの上でコトコトと煮えているおでんやシチューの香りも（カーボンニュートラルな暮らし、という自己満足も含めて）、薪づくりの肉体労働に十分報いてくれるものだと思います。

家の周りは街中でよくある車などの騒音がない（道路をあまり車が通らないのだから当たり前ですね）ためいろいろな音が良く聞こえます。越してきた年の夏に、窓を開けたまま床に就くと遠くからゴーという音が聞こえるので何の音かといぶかしみましたが、後にそれは六キロ離れ

た九十九里浜の潮騒の音だとわかって驚きました。春は庭や畑にいるヒバリやコジユケイやキジの音が賑やかで、田んぼに水が入るころになると家の四方からカエルの声が幾重にも響き渡ります。夏の日中はセミの音が庭中の木から降ってくるし、九月になるとちゃんと鈴虫やコオロギが鳴き始め、冬に入る前には落ち葉が屋根を伝っていくかさかさという音など、実に様々な音に満ちた暮らしとなります。反対に冬の夜などは音がなく、柱の振り子時計のコチコチという音が静けさをいや増すことになります。

田舎の庭はおいしいものの宝庫です。二月のまだ寒い頃に畑にはフキノトウがたくさん芽を出します（フキノトウのてんぷらは早春の味ですね）。三月には菜の花が、四月になるとタケノコやこごみやゼンマイやワラビなどの山菜が取れます。五月には露が茂り、三つ葉が明るい緑色の葉をそよがせ、オレンジ色のキイチゴが実を付けます。六月には庭のヤマモモや梅の木がたわわに実り、夏は紫蘇が森のように茂り、畑には紫色のナスや真っ赤なトマトが日を浴びて輝きます。秋にはミョウガがポコポ

コ花芽を出し、柿や無花果がたくさんなるのでカラスと競争で収穫になり、冬には金柑や柚子などの柑橘が鈴なりにで穏やかな日差しを浴びています。買ってくるのと違って、生えてきたら待たなしに料理をせねばならないので、融通は利きませんが、とれたての味わいは格別です。また短い旬を楽しむほかにもヤマモモ酒や梅干し、マーマレードや柚子胡椒などの保存食を作って季節を長く引かせる喜びもあります。

こうやって書いてみると、田舎の古民家に住む楽しみは五感を総動員できることにあるのではないだろうかと思えます。新緑の色も鳥の声も花の香りもごつごつした薪の手触りも季節の味覚も、とても鮮やかです。そして日々の仕事が終わらしたの喜びに直結します。コロナ禍でどこかに出かけることが極端に制限された中でも、どこかのびやかに暮らせたのは、ひとえにそのおかげだと思えます。今はただ早く感染状況が落ち着いて、以前のよううに遠方のたくさんの友人がまた古民家を満喫しに来てくれることを祈っています。



## ロマン・ロランとポール・デュパン

—音楽家、魂の協奏

植松 晃 一

ロランは「第二の母」と呼んで慕ったマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークについて次のように書いている。

「マルヴィーダほど若々しい精神を私は他に知らない（中略）マルヴィーダの精神は、来る朝ごとのさわやかさを喜び迎える精神であり、若い人々のいろいろの希望を喜び迎える精神であった。それは、彼らのいろいろな大きなまろみに信頼を用意しており、彼らの成功を観ると喜びに輝き、そして決して意気沮喪することはなく、もしも彼らが倒れたときには再び立ち上ることに力を籍す精神であった」<sup>1)</sup>

ロランもまた優れた才能を認め、成長を助けることに喜びを見いだしていた。「愛弟子」と呼んで期待を寄せたジャン・ド・サン＝プリヤ、自殺未遂から立ち上がるのを後押ししたパナイト・イストラティなどは好例だろう。音楽家ポール・デュパンもそうした人物の一人だ。ポール・デュパンは一八六五年、フランス北部のベルギー国境に近いルーベに生まれた。日本の雑誌『楽聖』は一九二八年にデュパンについて取り上げ、「その音楽には極めて容易に民衆的なる曲調と生氣と変化に富む風格を見出す事が出来る」「デュパンは実に、歌ひ、又歌ひつゝ、物語る民族の精神其物である」と評した。とりわけ数百曲に上るカノンは高く評価されている。

しかしデュパンは、正式な音楽教育を受けたことはない。パリへ出て二〇年、西部鉄道会社に勤め、家庭での気苦労に明け暮れる日々を送り、夜のわずかな時間に音楽を学んだ。音楽上の師はなく、巨匠の楽譜を読むことだけを手がかりに、独学で作曲を続けた。

そんなデュパンとロランの出会いは一九〇五年のこととされる。オーストリアの作曲家フーゴー・ヴォルフに関するロランの論文を読んで感動した詩人ウージェーヌ・オランドが「デュパンに会って彼の音楽に目を通してほしい」とロランに頼んだのが縁だという。デュパンは自作のオペラ『マルセル』を持参してロランに見せた。そのとき受けた印象について、ロランは女友達のソフィアにこう書き送った。

「彼は詩も音楽も自分で書いた一つのオペラをもつてきました。そのオペラは少しも私の気に入らなませんでした。脚本は愚にもつかぬものであり、音楽は私の好まない誇張的な調子のものでした。しかしそれが良い、ほんとうの音楽家の作品であることはう

たがう余地はありませんでした」<sup>③</sup>

自分は好まないが本当の音楽家の作品であるという評言は、いかにもロランらしい。自分の好みに合わないものは理解も評価もできない凡百の評論家とは違う。そしてロランは、デュパンの境遇を聞いて哑然とする。

「私は、その作者が独学でまなんだ以外に音楽の教育はうけたことがないこと——それどころかこの不幸な男は音楽会へ行くよゆうもなく、たとえはベートーヴェンのシンフォニーはコンセルヴァトワールの図書館で読んで知っているだけだということを知って哑然となりました。普通の音楽家なら先生に師事して易々と学べるただそれだけのことを学ぶのに、彼は未曾有の精力を使いはたさねばなりません」<sup>④</sup>

デュパンの非凡な音楽的資質と率直・誠実な人柄を見たロランは、同年代のこの男を援助し、孤立から救い出

そうと心に決めた。



デュパンの自筆譜

「私は彼にたびたび会い、彼を音楽会へつれてゆきました。そしてうれしいことには、とりわけこの六カ月間に、こんどは、まったく個性的な音楽が、洞察力の鋭敏な詩が、彼のうちに花開くのを見ました」

ロランは知人や有力者にデュパンの存在を知らせ、注意を向けてもらえるように頼むこともした。デュパンの作品が徐々に売れ始めてからも、ロランはこの音楽家のために心を砕いた。筆者の手元にあるロランの自筆書簡を見ると、デュパンの支援に奔走している様子がうかがえる。

「デュパンはパリにある西部鉄道会社の事務所に勤めていました。彼はそこで朝から晩まで忙しく働き、二〇〇〇フランほどの稼ぎがありました。夜しか作曲することができませんでした。私たちが彼を助けたとき、彼の健康はトラブルと生活苦で損なわれていました。」

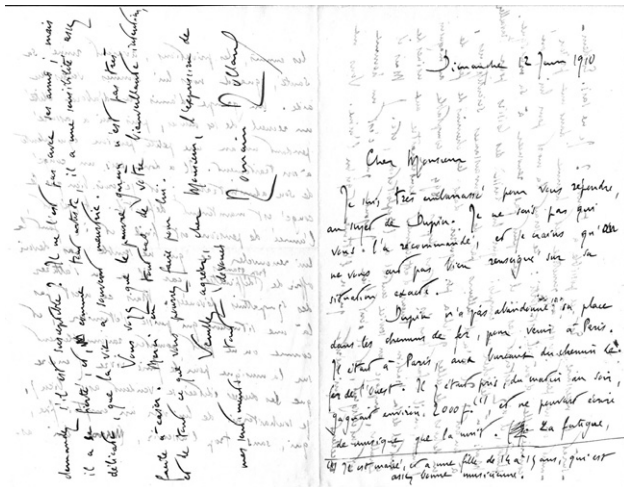
友人たちは、まず彼の作品集を出版し、一年間の給料に相当するわずかな年金を彼に支給しました。そのため彼は休職し、今やその休職は永遠のものになりました。年金が切れたので更新しなければなりません、それは大きな問題ではないようです。彼は多くの人々の献身的な共感を得ているからです。

しかし、このような状況がいつまでも続くことはないでしょう。出版した作品が売れているとはいえ、音楽で生計を立てるのは無理がありますので、それほど束縛を受けずに生活を保障できる定職に就いてほしいと願っています。それができるかどうか、私には分かりません。もちろん、彼を再び以前と同じような牢獄に戻すことなど考えられません。それは彼にとって死と同じことです。音楽を諦めることなどできないからです。

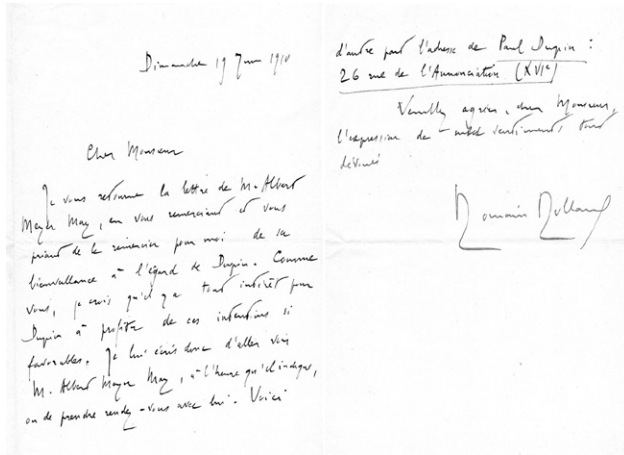
しかし、どこへ行けば、彼が自由に芸術活動に取り組める仕事があるでしょうか。一八九四年以来、西部鉄道会社での仕事（中央車両倉庫の経理や営業所の中核業務など）で身に付けた知識以外、科学的な

知識はありません。とはいえ彼は頭が良く、文章もうまい。尊敬され、愛されるに値する人物であることも付け加えておきます。

彼を感じやすいかどうかとお尋ねですね？ 怒



ロランの自筆書簡（1910年6月12日付・表）



ロランの自筆書簡（1910年6月19日付）

りっぱくはありませんが、彼には自尊心があり、すべての芸術家がそうであるように、かなり繊細な感受性を持っています。そのために、人生においてしばしば傷つけられてきたのです。この哀れな男が

仕事に就くことが容易でないことはお分かりでしょう。いずれにしても、彼に対するあなたの優しいお心遣いとすべてのご配慮に感謝いたします」

（一九一〇年六月二日付＝写真）

「アルベール・マイヤー・メイ氏のお手紙をお返しします。デュパンに対するお心遣いに感謝し、彼に代わってお礼申し上げます。私もあなたと同じように、このような好意的な申し出を利用することが、デュパンのためになると考えます」

（一九一〇年六月一九日付＝写真）

\*

ロランの自筆書簡の中で「友人たちは、まず彼の作品集を出版し」とあるのは、デュパンが『ジャン・クリストフ』に着想を得て作曲した一連の小曲をまとめたものことだ。

『ジャン・クリストフ』が信じられないほどの影響を彼におよぼしました。彼はそれを糧としました。彼はそれを体験したので、それを主題としてピアノとリートのための一連の小曲を書きました。私はそれを立派なものと思います。それらの曲は、私が『ジャン・クリストフ』を書いたのと完全におなじ感覚ではありません。しかしそのことはあまり重要ではありません。ひじょうに美しく、ひじょうに感動をあたえます。——私は数人の友人たちとそれらの第一集を出版させることを計画しました。そしてこんな幸運はめつたにないのですが、その出版に着手するに十分な以上の予約者を二月たらずで募ることに成功しました。私はめつらしく自分の非社交的な習慣と戦いさえして、最近、有力な大臣夫人を訪問しました。彼女はさつそくデュパンの後援者となることを受諾しました。そして西部鉄道会社での彼の地位を改善するように尽力してくれることになりました。万事ひじょうに都合よくはこんでいます。それで十月の学年はじめに、ジャン・クリストフを

テーマとした音楽集をお送りできると思います」<sup>(6)</sup>

(ソフィア宛書簡)

こうして出版された小曲集『ジャン・クリストフ』は、次のように三つのピアノ曲と、歌とピアノのための曲の計四曲から成る。

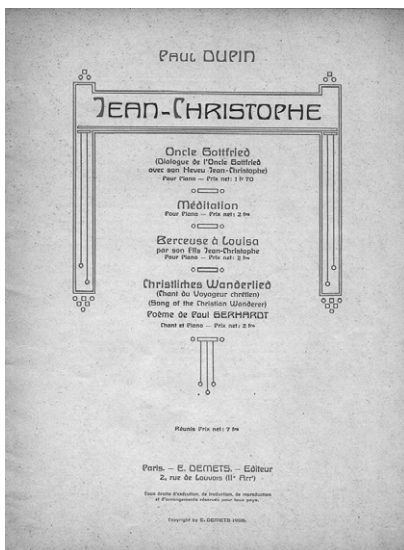
- ① 「ゴットフリート叔父」
- ② 「瞑想」
- ③ 「ルイーザへの子守唄」
- ④ 「キリスト教徒の旅の歌」

ロランは楽譜に序文を寄せ、「芸術のもつとも美しい花々は、そのすべてが世に知られているわけではない。それらはしばしば無名の、沈黙に囲まれた心の中に咲いている。騒々しい凡人たちが空疎な言葉と無駄な労働で名声を乱造する一方で、愛と創造力に富む魂は、無関心と惨めさの中で苦しみながら生き、死んでいく。そうした偶然にしか発見されない芸術の泉の驚くべき実例の一

つが、ポール・デュパンによるものだ」と書いた。詩的な個性や古典的な静寂さを持つこれら小曲の音楽的評価は読者に委ねるとしながらも、第一曲と第四曲のいくつかのフレーズには、ロラン自身が音楽として表現したいと思ったことのある感情が息づいているとも述べている。そしてデュパンを支え続けた友人、詩人ウージェーヌ・オランドは「真の芸術家の直感と寛大な心で、デュパンを信じることをやめなかった」と賞賛し、感謝を捧げた。ロランに献呈された第一曲の「ゴットフリート叔父」は、ゴットフリートがクリストフに民謡をうたてきかせる情景を描いている。幼いクリストフが真の音楽の啓示を受ける感動的な場面だ。素朴だが力強いゴットフリートの確かな声と、若く不安定だが活気に満ちたクリストフの声のやり取りを聞いていると、『ジャン・クリストフ』の場面が目に見えよ。

「夕闇の中でゴットフリートが歌いだした。彼は、よわい、おぼろな、いわば内面の声で歌った（中略）その歌には心を感動させる真実さがあつた。心の思

いがそのまま声になり歌になつてゐるふうであつた。透明な水とおしてのように、この音楽をとおして、彼の心の底までを読み取れるというふうだつた。歌がこんなふうになつて歌われるのをクリストフはこれまで聞いたことがなかつたし、またこんなふうな歌も聞いたことがなかつた。ゆるやかな、率直な、無邪気なこの歌は、おもおもしろく悲しげな、やや単調な足どりで、けつして急きこむことなしに進んだ。そしてときどきしばらく沈黙しては、どこへ行き着くかは気にかげずにふたたび歌いつづけられ、そしてその歌は夜の中に消えていった（中略）クリストフはもう息がつけず、ただ一つの身うごきもせず聴きいつて、感動のために凍りついたようになっていた（中略）「叔父さん、あれはなんの歌なの？ 言つて！ いま歌つたのは何の歌？」「知らないよ、あれは歌だよ」「叔父さんの作つた歌なの？」「わしが作つた歌なもんか、何てことをいうんだ！……古い歌なんだよ」〔ジャン・クリストフ〕



小曲集『ジャン＝クリストフ』表紙と第1曲「ゴットフリート叔父」

幼く純粋で調子に乗りやすく迷いがちなクリストフの問いに対し、大地にしっかりと根を下ろしたゴットフリートの声は静かでありながら力強く、温かい。それは素朴な信仰心、大いなるものへの畏敬の念に基づく誠実で善良な声だ。

「音楽で傲慢だったり、嘘をついたりすると、いつでも罰を受けるのだよ。音楽は度(ほど)ましく真面目であることを望むものだ。そうでなかったら、音楽なんかなんだろう？ 真面目なほんとうのことを言うためにこそ、美しい歌をわしらに贈って下さっている神さまにたいする不信だ、冒瀆(まうとく)だ」(ゴットフリート)

ゴットフリートの言葉は、音楽に限らず、詩文をはじめ芸術全般に通じる第一原則のようなものだろう。

デュパンの愛娘ジルベルトに捧げられた第二曲は田園の夜、幼いクリストフが自然の奏でる音楽に深く聴き入る情景を描いている。

ロランの妹マドレーヌに捧げられた第三曲は、母と二



人きりのクリストフがピアノを奏でる場面だ。編み物をしながら耳を傾ける母ルイーザはやがて眠ってしまう。互いに思いやる母と子の無言の対話が美しい。

第四曲は一七世紀の詩人パウル・ゲルハルトの詩句によってクリストフが作曲したもので、病床の老シユルツに強い感動を与える。この曲は楽譜の出版に貢献したエステル・マルシヤン夫人に捧げられている。

ロランはこの小曲集について次のように書いた。

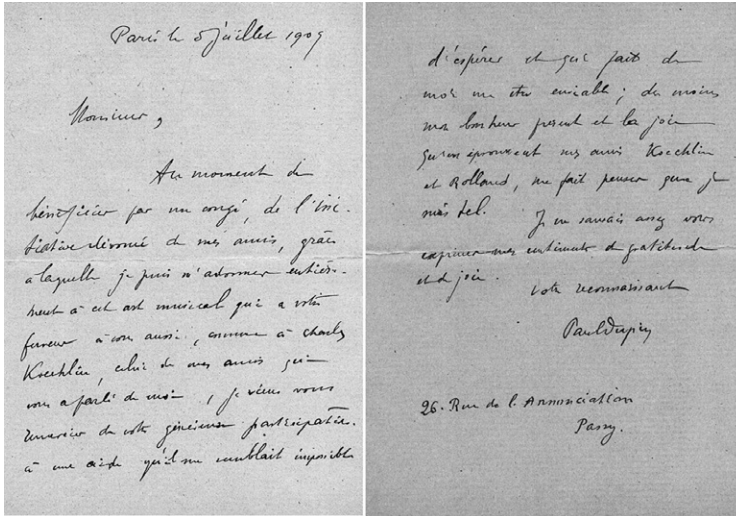
「それは言葉なき小詩です（中略）最後のリートは古典的な偉大さをもっています。「ゴットフリート伯父」は素朴な深遠な詩をそなえています。「ルイーザへの子守唄」はまったく美しいものです。——これらの作品を書きうるような音楽家はパリにはただの一人もいません。——『ジャン・クリストフ』がそうした音楽を生みだすことにしか役立たなかつたとしても、それだけですでに十分でしょう」<sup>⑨</sup>

（ソフィーア宛書簡）

小曲集『ジャン・クリストフ』の出版が叶ったころに書かれたデュパンの自筆書簡には、ロランへの感謝が綴られている。

「友人達が献身的に動いてくれたおかげで、私も音楽活動に完全に没頭できます（中略）私はいま幸せを感じていますし、友人のケクランやロランが与えてくれた喜びが、自分の存在価値に気づかせてくれます」（一九〇九年七月五日付書簡）

この後もロランは、デュパンの半生を記した記事を国際音楽協会の会報に寄稿したり、デュパンの作品だけを集めた演奏会を催して成功させたりした。その一方で「くだらないおべんちゃらで潰されるわけにいかない」<sup>⑩</sup>（詩人ジュール・ピオク宛書簡）と、「広場の市」から守ることも心を砕いた。デュパンも一時の成功に溺れることなく、謙虚に地道な努力を積み重ね、自分自身の音楽を追求していった。その結果「彼は多くの献身的な友をえました。そして彼らの中の若干のものは、彼が独立して



デュバンの自筆書簡（1909年7月5日付）

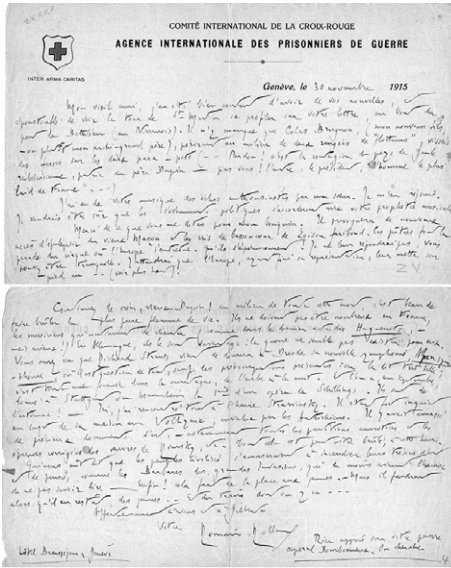
生活できるように、音楽に全的に身をささげるために、小さな年金を設けました（中略）偉大な画家クロード・モネ（ロダンとともに、私がフランスでもっとも尊敬している——そしてロダン以上に尊敬している芸術家）は、この場合に、ふかい同情を示しました。この問題に関して、私は立派な手紙を幾通も彼から受けました」（ソフィア宛書簡）

ロランはモネに次のように感謝を書き送った。

「私の友人は、あなたのおかげで、音楽に専念する自由を手に入れたのです。彼は人間としても芸術家としてもあなたの同情に値する人物であり（中略）彼の中にはまさに音楽の天才がいます」

\*

第一次世界大戦が始まり、ロランが評論集『戦いを超えて』によってフランス中から敵視される中でも二人の関係が損なわれることはなかった。ロランはスイス・ジュ



ロランのデュパン宛自筆書簡 (1915年11月30日付)

ネーヴからデュパンに次のように書き送っている。

「私の本(\*『戦いを超えて』のこと) についての感想をありがとう(中略) 騒ぎを引き起こすでしょうが、好きなだけ叫ばばいいのです。私は答えてやりませぬので、安心してください(中略) 親愛なるデュパンよ、創造を続けてください! この死の中にあつて、最も純粋な生命の炎を燃やし続けるのは美しい

ことだから(中略) 文明的な人々が、芸術や思想の宝庫に火をつけて楽しむなんて、誰が想像できたでしょう」(一九一五年一月三〇日付〓写真)

ロランは晩年に至るまでデュパンを気にかけていた。死の前年の一九四三年九月三日付のロランの日記には次のようにある。

「ポール・デュパンとアンドレ・ピロは非常に苦しんでいる。デュパンのために、芸術家を助ける手段を持ちそうな音楽界の著名人、特に美術アカデミーの常任理事アドルフ・ボシヨに手紙を書く」<sup>13)</sup>

ロラン没後の一九四七年、デュパンはある支援者に次のように綴った。

「そうですね、音楽を愛してください。楽譜を読むことに専念するのです。呼吸している空気が熱意で満ちているのはとても刺激的です。こうして道徳的な



二三五通を収めているというが、残念ながら公刊されていない。

(詩人・ライター／賛助会員)

- (1) みすず書房『ロマン・ロラン全集一七』「内面の旅路」片  
山敏彦訳
- (2) 『楽聖』一九二八年所収「ポール・デュバン——現代仏蘭  
西民衆派」山田実著
- (3) みすず書房『ロマン・ロラン全集三五』「したいソフィー  
ア」宮本正清・山上千枝子訳
- (4) 同書
- (5) 同書
- (6) 同書
- (7) みすず書房『ロマン・ロラン全集二』「ジャン・クリスト  
フ」片山敏彦訳
- (8) 同書
- (9) みすず書房『ロマン・ロラン全集三五』「したいソフィー  
ア」宮本正清・山上千枝子訳
- (10) AUTOGRAPHES DE ROMAIN ROLLAND RELEVÉS  
ET COMMENTAIRES par BERNARD DUCHATELET
- (11) みすず書房『ロマン・ロラン全集三五』「したいソフィー

ア」宮本正清・山上千枝子訳

- (12) AUTOGRAPHES DE ROMAIN ROLLAND RELEVÉS  
ET COMMENTAIRES par BERNARD DUCHATELET
- (13) JOURNAL DE VEZELAY 1938-1944 Bartillat
- (14) 神谷郁代著『魔法の指のひみつ』シモン
- (15) 立花隆＋立花ゼシ『調べて書く』共同製作『二十歳のこ  
ろ』1960-2001 新潮社

## ロランの時空と生なるコモنز

濱田 陽

広く人文学の立場から、書き溜めてきた文化、文明論等の論考を、共通する流れを照らし出すように二つの姉妹編に執筆、刊行しました。

新たなとらえ方と表現を求め、描いたものです。『生なるコモنز』は、わたしたちが様々な存在と多様な関係性を持つなかで、展開されている共有可能性の世界を考察したものです。

『生なる死——よみがえる生命と文化の時空』（ぶねうま舎、二〇二二年一〇月）

前者は、カミュ『ペスト』からメタファーとしての新型ウイルスをとらえる章を設け、シツシユ・ディディエ

『生なるコモنز——共有可能性の世界』（春秋社、二〇二二年五月）

教授にフランス語表現での教えをいただきました。後者は、みず書房で刊行予定の、ピケティ『資本とイデオロギー』の引用・考察の章が含まれています。

『生なる死』は、わたしたちの生きる舞台である時間、空間と、この舞台のアクターともいえる存在（自然、生きもの、人、つくられたもの、人知を超えるもの）について、

人や近代や西洋について考えるとき、自分のなかにも、ロマン・ロランが生き、書き、行動した何かが、声のように響いていると、ふと気づくことがあります。ロラン

は、どのような時空の感覚を生きていたのだろう、そして、ロランの「大洋感情」や「ユニテ」のイメージ、観念は、どのような生なるコモンズ（共有可能領域）としてとらえられ、これからの世界で、いかなる意味をもつのだろうか。

今回の執筆を終え、そのようなことを考えています。そして、ロランの世界が、近代に根ざしていながらも、近代的時空間に閉じ込められない、湧出する河のようなものであることを想います。

その名、作品を直接扱ったものでなくとも、本、音楽、行動、日常生活のひとコマに影響し続ける名、作品があつて、わたしたちに大きな作用を与えている存在といえるかもしれません。レヴィイ・ストロースからポスト・モダンを経てピケティまで、ロランの時代より後のフランスの重要な哲学、思想、作家の奔流を意識せざるをえない一方、そうしたことが脳裏をよぎります。

学生の時、ロランの作品やロラン自身にひかれ、憧れながらも、自分の生きる現実と、ロランの生きた世界との溝を感じることが増していくことがありました。とこ

ろが不思議なことに、時間が過ぎるうち、ロランが友としての相貌を帯び、このころのどこかに住んでいるような気持ちが生じてきました。

波のようなパンデミックや戦争の只中にある、この世界という舞台とわたしたちを含む存在について、新鮮な気づきが、ますます必要になってきていると思われず。

通俗的な新テクノロジーの時空観にしばらくられない、根っ子から自由な時空観を帯びてロランを読み、感じ、考え、ロランの生なるコモンズに思いをはせるとき、窓を開け、戸外に出て、吸い込む空気が、とても美味しく感じられます。

五感を自分らしく開放させ、自由を吸い込む心地よさに、ロランとの関係性は深くつながっていると思えるのです。

（帝京大学教授／賛助会員）

## ロマン・ロランの会に役立ててもらおう

井上幸子

私が初めてロランに出会ったのは二〇歳過ぎのこと、阪大生だった親友の兄からでした。それまで日本の作家が主でヘッセやチェーホフなどしか読んでいませんでした。初めて『魅せられたる魂』を読みショックでした。

一〇〇年以上前に男性作家がこれほど女性の生きざまを描いていることに！ 就職し読書の余裕がなくなりまして。退職し足の手術をした後、京都の会を知り、入れていただきました。

わたくしが寄付をさせていただいたのは、若い時の『魅せられたる魂』の女性の生き方のすごさが底辺にあったことでした。今後はお金を使うこともないとの判断も決断を急がせました。

この度の寄付は福祉事務所へした残りです。「もう少し前であれば」よりお役に立てるのにと残念です。

宮本エイ子さんのお働きにいつも敬服しています。ありがとうございます。

(賛助会員)



財団法人ロマン・ロラン研究所設立五〇周年記念  
〈朗読と音楽〉のマチネに出演させて頂いて

村田 まち子

コロナ下で延期せざるをえなかったにもかかわらず、年が明けてもコロナ感染は増加し続け、不安の中迎えた一月二十一日朝、天気予報通りとはいえ、ここ数年来の積雪。十二、三センチはあったろうか。美しい白銀の世界に見とれながらも、お客様の足下も心配になった。けれどそのような状況下でも、足をお運び頂いた大勢のお客様、また今回の行事に携わって下さった皆様に本当に感謝の気持ちで一杯だ。そして何より無事に済んだことに安堵している。

七百年という長い歴史の下、平和と人々の心の安らぎを探究してこられたという金剛流の、その神聖な能舞台

に立たせて頂き、鏡板の老松を背に身の引き締まる思いであった。

音楽を担って下さった三橋桜子さん、パブロ・エスカンデさんご夫妻は私と同じ町内、徒歩二分の所にお住まいで、御一緒させて頂きとても嬉しく思っている。素晴らしい構成と素敵なクラブサンの音色に、朗読しながらも聞き入ってしまいそうになった。実は当日朝、道路の様子を見に出ると、我が家のすぐ近くの緩やかな勾配の狭い曲がり角に、大型トラックが雪でスリップし、進まないで斜めに止まっていた。大変だな、どうやって曲がるのだろうかと思っていたが、程なく、そのトラックはなく、ホッと胸を撫で下ろした。後で分かったことだ

が、何とその大型トラックの中にはまさに当日の大事な大事なクラブサンが載っていたのだった！　そしてエスカンデさんも運転される方と一緒に四苦八苦されていたとのこと！　気づかずごめんなさい！

今回のマチネでは「ジャン・クリストフ物語」より、少年クリストフの恋を描いた「ミンナ」の章を朗読させて頂いた。

クリストフは貧しかった幼少時から差別や不正を経験し、ミンナとの初恋においても理不尽な酷い差別に直面する。その彼の苦悩、心情を丁寧にお伝えできていたら幸いだ。

今、まさに、目を覆いたくなる無惨な戦争が行われ、命が奪われ、街が破壊されている。世界中に差別や争いのない平和な時代が訪れることはあるのだろうか。以前朗読させて頂いたロマン・ロランの「戦時の日記」「一若き兵士の手紙」を読み返し、改めて悲惨さに胸が詰まる思いでいる。

最後に

この「ジャン・クリストフ物語」を発行されるにあたり、親子で読めるをコンセプトに補訂されたとお聞きしている。子供達にも「声」でも届けられる機会があれば嬉しい。

(賛助会員)

\* 金剛能楽堂様から当研究所設立五〇年を記念して会場と立派な飾花のご提供をいただきました。ここであらためて深く感謝申し上げます。(編集部)

## コロナ禍におけるロマン・ロラン研究所の活動

清原 章 夫

二〇一九年末に中国湖北省武漢市で発生したコロナウイルス感染症は、二〇二〇年三月にパンデミック（世界的大流行）を起こした。パンデミック発生から一年以内にワクチンが開発されたが、残念ながら感染は収束しておらず、二〇二二年三月二十一日時点で全世界で感染者数の累計は四億七一〇七万人、死者は六一一万人に達した（ジョンズ・ホプキンス大学調査）。

ロマン・ロラン研究所の活動もこの二年間、コロナウイルスに翻弄された。具体的にコロナ禍の影響を受けた当研究所の活動を以下に述べる。

まず、年十一回、毎月第四土曜日に開催している読書会である。緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発令

されるたびに、参加者の健康に配慮して読書会を中止した。そのため、二〇二〇年度はわずか二回、二〇二一年度は七回しか開催できなかった。参加者も通常は十数名の方が参加されていたが、この二年間はその半分程度だった。会員のほとんどが六十歳以上の高齢者で、県外からの参加者が半分かちかくであることを考えると、参加者がゼロだった月がなかったのは稀有なことだと思う。

次に、年一〜二回開催していた講演会および演奏会も中止または延期せざるを得なかった。まず、二〇二〇年一二月十九日（土）に開催を予定していた作家の平野啓一郎氏の講演会を延期にした。『コロナ共存社会における文学の役割と分人主義』という誠にタイムリーなタイト

ルで、今年度の開催を目指して現在日程を調整中である。決まり次第ロマン・ロラン研究所のホームページでご案内するので、もうしばらくお待ちいただきたい。

次に、二〇二二年一月三〇日（土）に開催を予定していた、財団法人ロマン・ロラン研究所設立五十周年記念の『朗読と音楽』のマチネ』も延期になり、本年二〇二二年一月二一日（金）に金剛能楽堂で無事開催することができた。村田まち子氏による『ジャン・クリストフ物語』の朗読は本を読む喜びに溢れていた。また、三橋桜子氏とバプロ・エスカンデ氏は、演奏される機会がほとんどないベートーヴェンのクラブサン曲を生き生きとかつ繊細に弾かれた。コロナ禍であるからこそ、音楽には慰め以上の力があることを認識させられた。

同じく財団法人ロマン・ロラン研究所設立五十周年記念の「古都・京の記憶に残すべき戦時の日仏交流 ― 関西日仏学館 ―（トークと詩の朗読）」は、元NHKエグゼクティブアナウンサーの加賀美幸子氏をパネリストおよび朗読者としてお招きして、二〇二二年二月一三日（日）に開催する予定だったが、二〇二二年五月一五日

（日）に延期せざるを得なかった。

今後もコロナの感染が拡大すれば再延期する可能性があるが、何とか予定どおり開催できるよう祈っている。

このようにコロナウイルスに振り回された二年間だったが、唯一コロナに負けないで実施できたのが、ロマン・ロラン研究所のホームページのリニューアルである。一九九九年一月に開設して皆様にご愛顧いただいたホームページをデザインおよび機能を刷新して、二〇二二年三月二七日に公開することができた (<https://institut-romain-toland.jp/>)。また、『ジャン・クリストフ物語』を紹介するアニメーションを新しいホームページで公開するので、是非ご覧いただきたい。ホームページではこれまで同様、読書会や講演会、朗読会および演奏会の案内も掲載している。コロナ禍が続く間は、行事の中止や延期の可能性があるので参加を予定されている方は、小まめにホームページをチェックしていただきたいと思う。

ロマン・ロラン研究所ではこれからも、コロナと共存して活動していく道を模索していくので、ますます皆様のご支援を賜りたい。

## 二〇二二年、読書会の報告

毎月第四土曜日、私は阪急電車と市バスを乗り継いで京都・銀閣寺にあるロマン・ロラン研究所を訪れる。柔らかな陽射しが差し込む昼方、参会者はガラッガラッと玄関の戸を引いていつもの部屋に集まってくる。

毎月来る人も、そうでない人も、友人や知人を伴う人も、ロマン・ロランをよく知る人も知らない人も、さまざまな縁や記憶に導かれ、この日のこの時間にはいつもたくさんの方が集った。ここ数年は『ジャン・クリストフ』を読み、ある一場面の内容を報告し、朗読で味わう。音楽を聴き、お茶を飲みながら意見や感想を交わす。穏やかな学びの時間、読書会の見慣れた風景だ。

二〇二二年四月にはロマン・ロラン研究所の読書会は

第三八五回（五六〇）を迎える。聞くところには、ずっと前は学生の参加も多く、自由闊達な議論が交わされる時代もあったという。その時代の影響を色濃く反映しながら、本当に様々な人がこの読書会の歴史を作ってきた。しかし、新型コロナウイルス感染危機に見舞われた二〇二〇年と二〇二一年は過去に例を見ない活動を強いられた。その記録をここに留めておきたい。

初めて感染に対する緊急事態宣言が出された二〇二〇年春。不要不急の外出自粛が求められる中、その年は六月そして九月を最後に活動は休止となる。その後、ワクチン接種の普及やwithコロナという言葉に象徴される社会的な意識変化もあり、読書会もその門だけは開い

## 四 宮 へ

ておこうと、二〇二二年春に漸く再開の運びとなった。

私の手元にある資料からは二〇二二年の活動は三月、六月、七月、九月、一〇月、十一月の合計六回となっている。いずれの会も参加者は四、五人であり、ほぼ同じメンバーが集まった。以前は一番人気だった窓際の椅子の特等席には誰もおらず、今は庭からの光がそつと座面を照らしている。

二〇二一年は『ジャン・クリストフ』第七巻「家の中」を読み進めてきた。アントワネット亡き後、クリストフとオリヴィエが運命的な出会いを果たし、アパートで共同生活を始める。そのアパートが「家の中」であり、ここにはフランスの敗戦による精神的孤独の中に閉じこもって生きる人たちがあった。家の中はフランス社会の縮図でもあり、そこでクリストフとオリヴィエはお互いの民族や宗教観の違いを背負い対立しつつも、調和によって真の「友」となってゆく。若さ故の純粹さと激しさが、強く儂<sup>はかな</sup>く心を打つ場面である。

図らずも自分たちの自粛生活が「家の中」の境遇に重なるように思え、ある場面でクリストフが精神の孤立に

向かうオリヴィエに向かって叫んだ言葉に皆が感動した。

「力が足りない。生命力が足りない。人間がほんとうに生きているときには生きる理由を自問しはしない。人間は生きるために生きる——なぜなら、生きることがすばらしいことだから！」

(みずす書房 片山敏彦訳)

かつての賑やかな読書会は様変わりし、会の存在を絶たぬよう、細くとも糸を張り続けることが目的となった。しかしロランの名のもとには、いつも自由に息のつける空気が流れていた。集う友とその空気を吸い込み、感情を解き放ち、特にあの時期はそれが一層ありがたく、心を許せることをこの上なく嬉しく思った。同時に、顔を合わせる人がいるからこそ、顔を合わせていない人を慕い、心配し、再会への想いを強くした。

新型コロナウイルス感染と機を同じくして読み始めた「家の中」はこう始まる。

「自分には友達が一人ある！ 一つの魂を見つけた  
ことのうれしさ —— 嵐のただ中でその魂の中へ身  
をひそめることができる！ 愛情のこもっている確  
実な一つの避難所を見つけたことのうれしさ！」

（みすず書房 片山敏彦訳）

ロマン・ロラン研究所の読書会は、愛情のこもっている  
確実な一つの避難所のような存在なのだろう。友があ  
り、一人ぼっちではなく、息をつくことができる。友の  
眼によって世界を新しく見直し、友の心によって、生き  
ることのすばらしさを味わう。

「これからも一回でも多くこの会を重ね、未来へとつな  
いでいきたい。

## ロシアによるウクライナへの武力行使の即時停止を求める声明

一般財団法人 ロマン・ロラン研究所

二月二四日から始まったロシア軍のウクライナ侵攻により、ウクライナ国内では莫大な死者と負傷者が出ており、数百万人の難民が隣国に避難するなど混乱を極めている。当研究所は、一刻も早い武力行使の停止を求める。

ウクライナ側もロシア側も相手が先に攻撃を仕掛けたと主張して、各国での報道も真偽の見極めが困難な部分もあるが、双方の主張はともかく、国連憲章第二条四項のとおり、国際紛争の平和的解決の義務を順守し、武力ではなく、話し合いで解決するべきである。

ロシアのプーチン大統領は、NATO加盟国及びその支持勢力が東側に拡大しており、ロシアへの安全保障上の脅威が生まれていること、ウクライナ東部のルガンスク・ドネツク地域のロシア系住民が虐げられており救援を要請されたとのことを理由として、「自衛権」を主張して侵攻を正当化している。

しかし、他国の外交安全保障政策を変更させるために侵略を行うなど言語道断であり、第二次世界大戦を経て確立された「主権尊重、領土保全、政治的独立の尊重」の各原則をすべて踏みにじるものである。到底許されない。

ロシア軍は、ウクライナの軍施設だけではなく、原子力発電所や一般居住地域・病院・学校まで爆撃し、甚大な被害を与えている。さらに、プーチンは核抑止体制の準備を整える命令を発しており、核によるけん制まで行っている。これらは、いづれも戦争犯罪を構成するものであり、直ちに止められなければならない。

ロシア国内で、人々はロシア軍による攻撃を非難し、中止を求めるデモなどが起きている一方、ロシア政府は、その行動参加者を弾圧し、拘束している。表現の自由や平和を求める声を弾圧しなければ戦争ができないならば、その戦争が間違っていることは明白である。

一方、ウクライナではロシアによる侵攻は独立を犯すものとしてロシア軍に徹底抗戦を呼び掛け、米国はじめNATO加盟国からの武器供与などを受けて、ロシア軍撤退まで戦闘を止めないとして、停戦は見通せない。

さらに、この紛争を民族問題だけの視点に限定し、日本にいる個人のロシア人を誹謗中傷する対応は間違っている。当研究所は、ロシアもウクライナも、ロマン・ロランが敬愛したトル



ストイに限らず、ウクライナのゴーゴリも含めて、数えきれないほどの偉大な先駆者が出た国として親しんできた。日本人の祖先が戦争に起因した虐待をシベリアやアメリカで受けたことも、ソ連や米国における視野の狭い民族主義に由来するものでもあり、このような民族主義は戦争の停止と平和の実現にむしろ有害であったことを忘れてはならない。

日本は世界大戦で武力行使により自国及び近隣諸国の民衆の多くが犠牲になったことを反省し、憲法第九条において「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」として平和主義を世界に宣言し、あらゆる武力による威嚇又は武力の行使を否定している。

ロマン・ロランは周囲のほとんどすべての人たちが戦争になびいた時に、自身の身の安全も言論の自由も脅かされながらも、戦争反対を主張続けた。当研究所は、ロマン・ロランのあらゆる戦争を非とする徹底した平和擁護の精神を引き継ぎ、ロシア軍のウクライナ侵攻の即時停止を求めるものである。

二〇二二年三月一七日

## 短 信

\*小西卓明氏 pandemicが始まってから早くも二年が過ぎ、京都もしばらく、ご無沙汰となつてしまいました。仕事以外では、インドアな生活が普通になって来ましたが、また京都でのイベント等へ参加できる日を楽しみにしております。

\*折田忠温氏 『ジャン・クリストフ物語』のCDを聴かせていただきました。ゴットフリート、なんと懐かしい響きでしょうか、青春時代、多くの慰めと勇気をいただいたことを思い出しております。

\*大谷暢順氏 祝 仏国勲章 レジオン・ドヌール・オフィシエ勲章受章。元当研究所理事、京都日仏協会名誉会長。本願寺財団理事長。

\*大谷祥子氏 祝 二〇二二年度京都府文化功労賞受賞。八月にはデビュー三〇周年記念コンサート予定、子供たちへの箏曲指導に情熱を傾けている。

\*山下雅子氏 朝日新聞四月二十五日付「まなびつながる広場」「本がくれたもの」コーナーで、東京芸大作曲科を経て日本人で初めてパリ国立高等音楽院指揮科で学び海外で大活躍中の指揮者阿部加奈子さんの読書へのこだわりを知りました。人間という存在を考え抜く音楽家の相棒とする

ものは読書であること。生涯のおすすめの本はためらうことなく『ジャン・クリストフ』。ロラン敬愛者にとつてうれしいニュースです。

\*イリーナ・メジューエワ氏&明比氏 わたくしたちはロシアとウクライナのことでも精神的に辛い日々を過ごしております。コロナのことも心配が絶えませんし、本当に厳しい時代だと思えます。

二〇一九年一〇月の演奏会（日本ロマン・ロランの友の会）七〇周年記念コンサート）のライブ録音を収録したCDの発売を計画しております。

ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ集

第八番「悲愴」・第九番・第一七番「テンペスト」・

第二六番「告别」・第五番・第一二番・第二三番「熱情」  
よろしく願っています。

## 十 訃報 十

### 稲畑 勝雄さん

二〇二二年四月一九日 誤嚥性肺炎のため死去、九五歳。稲畑産業相談役・元社長。当研究所設立時、稲畑家二代目太郎さんから引き継ぎ監事として長くご賛同、ご援助をいただいた。「うちは武器を売りません」と。大阪商工会議所副会頭、フランスへの友好は初代勝太郎さんからゆるぎなく続く。レジオン・ドヌール・コマンドール勲章。ご冥福を祈ります。

### 神谷 郁代さん

二〇二二年一〇月六日 肺炎のため死去、七五歳。七二年、エリザベート王妃国際音楽コンクールで入賞。欧州各地でも活躍。モーツァルトやベートーヴェン作品の端正な演奏で知られた。当研究所でも二〇〇一年財団設立三〇周年記念コンサート「ベートーヴェンを弾く」をはじめとして四回、なかでも二〇〇八年ロマン・ロラン国際シンポジウムに私たちと同行参加くださった。ロランが愛したベートーヴェンの「皇帝」を世界遺産ヴェズレーのマドレーヌ寺院で夜の寒さのなか演奏いただいた。ドイツをはじめフランスの聴衆者の絶賛を浴びた。

(台掌)

## 寄贈図書

フランス ロマン・ロラン協会

+ 冊子 カイエ 四七号 四八号 二〇二一、二〇二二

+ Cahier hors-série Compagnons de route 「道ずれたち」

編集 ラコスト 二〇二一

+ Hommage au professeur Bernard Duchatelet 追悼

デュシャトレ先生 二〇二二

• 久保久子さん 「図書」岩波書店 二〇二二年 (五) ロマン・

• 濱田 陽さん 『生なるコモンズ——共有可能性の世界』春

秋社 二〇二二

• 小森謙一郎さん 『人文学のレッスン』水声社 二〇二二

• 『人文学のレッスン』水声社 二〇二二

# 財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頽廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

## ◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

- 講演会
- 読書会・研究会
- 機関誌『ユニテ』発行

## ◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

- ロマン・ロランの著作に感動、また
- 彼の周辺の芸術家たちに興味、
- あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
- いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。
- 特典Ⅰ①機関誌『ユニテ』の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。
- 会員Ⅱ一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

# ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	一九八九	中国文学とロマン・ロラン	相浦 杲
	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
一九七二	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂彌	6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
	12・18	私の人間観	末川 博	11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
一九七四	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	一九九〇	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
12・5	12・5	ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	1・27	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
			演奏…玉城 嘉子	6・2	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
一九七六	7・11	ロマン・ロランとゲートル ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一	9・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
			南大路振一	10・26	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
			岡本 清一	11・30	ロマン・片山・ヘッセ	小尾 俊人
			岡本 清一	一九九一	ロマン・ロランと私	松居 直
			岡本 清一	3・1	ロマン・ロランと私	松居 直

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ ロマン・ロランとベートーヴェン 青木やよひ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る 尾埜 善司・今江 祥智	
9・27	ロマン・ロランとデュアメル 村上 光彦	9・9	ロマン・ロランと音楽 中野 雄	
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性 兵藤正之助	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ B・デュシヤトレ	
11・29	初めにロマン・ロランあり 岡田 節人		ロランとフランス革命 河野 健二	
一九九二			自然科学とゲーテ 岡田 節人	
6・26	〈大洋感情〉と宗教の発端 岩田 慶治	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽 ベートーヴェン、デュカ他作品 岡田 暁生	
9・25	ロマン・ロランとイタリヤ 戸口 幸策			
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって 鶴見 俊輔			
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会 ピアノ演奏…山田 忍	12・24	おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」 で ピアノ演奏…小坂 圭太 今江 祥智	主太
	静かにやさしき顔 佐々木斐夫			
	不思議な静けさ―宮本正清の世界 小尾 俊人		映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	
一九九三		一九九五		
1・29	自伝的諸作品について 佐々木斐夫	1・27	ロマン・ロランと日本人たち 小尾 俊人	
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男	6・2	私の歩んだフランス文学の道 片岡 美智	
5・24	ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄	11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺 岡田 暁生	
6・23	『魅せられたる魂』を語る(前) 重本恵津子			

一九九六	6・14	ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫	10・30	ロマン・ロラン記念コンサート	ピアノ演奏…小坂 圭太
	11・16	レクチャーコンサート	岡田 暁生			レクチャー…岡田 暁生
		ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番	ピアノ演奏…北住 淳	11・25	ロマン・ロランと大佛次郎	村上 光彦
				一九九九		
11・18		「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	本山 美彦	6・11	ロランと音楽	岡田 暁生
一九九七	1・17	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと	區 建英	10・8	「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念	園田 暁生
		魯迅			園田高弘「ベートーヴェンを弾く」	園田 高弘
		わが青春と一生	岩淵龍太郎	12・1	お話とピアノ演奏	森本 達雄
6・6				二〇〇〇	ロマン・ロランとインドの精神	
9・19		ロマン・ロランと結核の時代	福田 真人	10・13	ロマン・ロラン没後五十五年と日本	佐々木斐夫
10・4		ピアノとチェロのための夕べ	ピアノ演奏…北住 淳	二〇〇一		
					ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉	青木やよひ
		ロマン・ロラン記念コンサート	チェロ演奏…小川剛一郎	2・23	シンポジウム	今江 祥智
一九九八						尾埜 善司
6・8		ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫	6・23	(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念	神谷 郁代
9・25		ロマン・ロランと政治的魔術からの解放	柳父 図近		コンサート	神谷 郁代
					神谷 郁代「ベートーヴェンを弾く」	

- 12・21 ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー  
 二〇〇二 デイ・デイ・エ・シツシユ  
 二〇〇四
- 4・20 ロマン・ロラン記念スプリングコンサート  
 ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ  
 ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ  
 朗読 村田まち子
- 11・11 ロマン・ロランの後継者たち  
 蜷川 謙
- 二〇〇三 4・19 ロマン・ロラン記念スプリングコンサート  
 ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ  
 ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ  
 9・11 抗日中国における中仏文化交流  
 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評  
 価したか  
 内田 知行
- 5・10 ロマン・ロランの作品による音楽とレコード  
 尾埜 善司  
 二〇〇五 現代の法とヒューマニズム  
 加古祐二郎と瀧川事件  
 園部 逸夫
- 5・31 戦争と平和、科学を考える  
 プリーム・レーヴィを語る  
 ジル・ド・ジェンヌ  
 ピアノ演奏…沖本ひとみ  
 6・12 ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート  
 梅原ひまり 神谷郁代 デュオ  
 ヴァイオリン演奏…梅原ひまり  
 ピアノ演奏…神谷 郁代
- 11・22 ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える  
 解説 西成 勝好  
 生々発展する魂  
 ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン  
 峯村 泰光  
 青木やよひ
- 6・25



- 10・29 交差する肖像  
 村田まち子・宮本エイ子  
 ロマン・ロランとクロードル  
 中国研究を通しての日仏交流  
 京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合  
 狩野 直禎
- 二〇〇六 戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン  
 山口 俊章 二〇〇八  
 今藤政太郎
- 11・24 日本におけるロマン・ロラン受容史  
 デイ・デイ・エ・シツシユ  
 通訳 シツシユ 由紀子  
 3・8 朗読の会  
 親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』  
 会員たち
- 二〇〇七 琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート  
 大谷 祥子  
 榎本 泰子
- 2・3 歌と朗読の会  
 豊 剛秋・増永雄記  
 9・16 前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演  
 ロマン・ロランと日本人たち  
 尾埜 善司
- 「ピエールとリュース」朗読  
 歌・下郡 由 10・4  
 ロマン・ロラン国際平和シンポジウム  
 宮本正清の詩「焼き殺されたいとし子らへ」  
 「わらい」朗読  
 尾埜 善司
- 7・21 朗読の会  
 第一次世界大戦とロマン・ロラン  
 フランソワ・ラベット  
 ピアノ演奏…神谷 郁代
- そして『母への手紙』

- 二〇〇九
- 2・7 朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』  
ピアノ演奏…岩坂富美子
- 二〇一〇
- 6・13 『日本ロマン・ロランの友の会』六十周年記念  
レクチャー・ギターコンサート 西垣 正信  
フリー・ツォン ピアノリサイタル 高橋 哲哉
- 9・30 犠牲の宗教への問い
- 10・24 小林多喜二とロマン・ロラン——反戦・国際主義  
の文学を求めて エヴリン・オドリ
- 二〇一〇
- 7・24 一九五三年のフランスの子供の絵特別出品(京  
都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓  
作品展)
- 9・29—10・3 都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓  
作品展)
- 10・9 ピアノリサイタル 神谷 郁代
- 二〇一一
- 2・19 朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トルス  
トイの生涯』『伯爵様』 会員たち
- 二〇一一
- 11・19 フロイトとロラン——災厄の後に、幻想の前で  
小森謙一郎
- 二〇一二
- 1・27 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会  
小尾俊人氏へのオマージュを込めて——京都会場  
講演『ジャン・クリストフ』を読みかえして  
村上 光彦
- 3・5 スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ  
守田 省吾
- 3・29 朗読の会  
わたちの祭典・ワークシヨップ『魅せられたる魂』  
アンネットとシルヴィ 会員たち  
『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会  
小尾俊人氏へのオマージュを込めて——東京会場  
琴とヴァイオリン合奏  
琴…大谷 祥子 ヴァイオリン…白須 今
- 『春の海』 宮城道雄 作曲  
『夢のあと』 フォーレ 作曲

7・28

朗読の会『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

於 ロマン・ロラン研究所

10・20

ロマン・ロランと賀川豊彦 濱田 陽

二〇二三

ヴィヴエーカーナンダ生誕一五〇周年記念

6・22

スワームイー・ヴィヴエーカーナンダの生涯と

メッセージ

スワームイー・サティヤローカーナンダ

7・6

〈朗読とピアノ〉 オマージュ宮本正清

〈朗読〉『戦時の日記』『ジャン・クリストフ物語』

詩集『焼き殺されたいと子らへ』

朗読 会員たち

〈ピアノ〉

岡田 真季

作曲 ポール・デュパン

曲目 『ジャン・クリストフ』

11・16

世界遺産ヴェズレー ロマネスク芸術の宝庫

アンドレ・アンジェイ・グルシエフスキ

二〇一四

9・26 シター演奏と朗読

シター演奏

朗読 『ピエールとリュース』など 会員たち

11・1

第一次世界大戦一〇〇年とロマン・ロラン没後七〇

年記念 I・F〈読書の秋〉共催

第一次世界大戦下の知識人——アランとロマン・

二〇一五

9・19 戦後七〇年と憲法九条の意義 曾我部真裕

11・28 ロマン・ロランと聞き手として、証人として

『ヴェズレー日記（一九三八—一九四四）』をめ

ぐる考察 デイデイエ・シツシユ

通訳 シツシユ 由紀子

二〇一六

ロマン・ロラン生誕一五〇年&財団法人設立四五周年纪念事業

10・8

朗読会 読んで聴かせる『ジャン・クリ物語』

——ピアノ演奏付き——

- 朗読 村田まち子ほか会員  
ピアノ 岩坂富美子  
講演会 ガンディー&ロランの存在から今の世界  
を読み解く  
宗教学者、山折哲雄先生に聞く  
山折 哲雄  
聞き手 濱田 陽
- 10・29
- 二〇二七  
コンサート 箏とギター、ヴァイオリンとチェン  
バロで聴くベートーヴェン  
大谷 祥子、西垣 正信  
大谷 玲子、塩地加奈子  
会場 金剛能楽堂
- 1・28
- レセプション 京都ガーデンパレスホテル  
戦争と文学 桑原武夫「第二芸術論」から見た戦  
後日本 大浦 康介  
ロマン・ロラン、二〇世紀におけるユゴリの作家  
デイデイエ・シッシュ
- 12・9
- 二〇一八  
日本国憲法の立憲平和主義と自民党改憲草案の間
- 6・9
- 10・20  
題点 山内 敏弘  
ポール・クローデル生誕一五〇年記念「ユニテと  
共同出生」 中條 忍
- 二〇一九  
日本ロマン・ロランの友の会七〇年記念  
10・8  
イリーナ・メジューエワ ピアノリサイタル  
ベートーヴェンを弾く  
イリーナ・メジューエワ
- 11・30  
時代の流れにあらがって——大河小説の可能性  
会場 京都コンサートホール  
野崎 敏
- 二〇二〇  
10・25 『ジャン・クリストフ物語』朗読とヴァイオリン  
演奏 朗読 村田まち子  
ヴァイオリン 都呂須七歩  
ピアノ伴奏 栗原日菜子
- 二〇二二  
財団法人ロマン・ロラン研究所設立五〇年記念  
1・21 朗読と音楽のマチネ

『ジャン・クリストフ物語』を読む

朗読 村田まち子

ベートーヴェンのクラヴサン曲を弾く

三橋桜子&パブロ・エスカンデ

会場 金剛能楽堂

## 『ユニテ』編集を終えて

『ユニテ』49号をお手元にお届けします。例年にくらべ刊行が大幅に遅れましたこと、謹んでお詫びいたします。

この一年も、コロナウイルスの影響で講演会などの開催がままならず、この誌面も、昨年の「ロランとベートーヴェン」小特集に代わって、今回は「パンデミックに生きる」をテーマに、読者の皆さまにご寄稿いただくことにしました。お忙しいなかお原稿を寄せていただいた七名の方々に、心より感謝申し上げます。

まだコロナウイルスは終息したとはいえませんが、この二年間は、読者の皆さま一人一人にとって貴重な経験であったと思います。しんどい・つらいを基調としながらも、私たちに共通してわかったのは、人間は孤独であるという厳然たる事実と、だからこそ他人とのつながりを求め、社会をつくっていく存在である、ということのような気がします。パスカルではありませんが、人間は考える葦であることも、あらためて知りました。

そのような私たちの経験をふみにじったのが、二月二

十四日に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻でした。当研究所の思いは、本誌にも収録した「声明」にある通りです。理由は何であれ、ロシア国家によるウクライナへの軍事侵攻を許してはならない、一方で、アメリカはじめロシアへの経済制裁やウクライナへの武器供与をしている行為にも反対しなければなりません。日々、戦時下に置かれている人々の生活に心を傾けること、また報道はほとんどありませんが、パレスチナはじめ世界中で起こっている同様なことにも、等しく目を向けることが大切だと思います。それが、普遍主義と徹底した平和擁護に立つロマン・ロランの精神ではないでしょうか。

皆さまのご自愛をお祈りします。

(守田省吾)

### 編集部

守田 省吾 宮本エイ子

清原 章夫 村田まち子

四宮こころ

シツシユ・デイディエ

ユニテ 第四十九号

発行日 二〇二二年七月二十日

発行者 一般財団法人

ロマン・ロラン研究所  
理事長 西成 勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>  
E-mail [rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp](mailto:rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp)  
[institut.romain.rolland@gmail.com](mailto:institut.romain.rolland@gmail.com)  
[miyamoto.rolland@outlook.jp](mailto:miyamoto.rolland@outlook.jp)

# U N I T É

## Sommaire

Vivre avec la pandémie : appel à contributions

Réflexions sur le “50<sup>e</sup> anniversaire de la fondation  
de l’Institut Romain Rolland”

Yumiko MATSUDA

Vie quotidienne et lecture depuis le début de la pandémie

Daizo KUROYANAGI

Réflexions sur l’abandon

Masako YAMASHITA

Un interlocuteur : l’acteur Akira Takarada et Romain Rolland

Yumiko YASUKI

Nouvelles de Grande-Bretagne

Harukiyo HASEGAWA

Soutien apporté par la famille et les amis

Hisako KUBO

Vivre dans une vieille maison

Yukiko NODA

Romain Rolland et Paul Dupin : les musiciens, le concert de l’âme

Koichi UEMATSU

L’espace-temps chez Romain Rolland comme bien commun vivant

Yo HAMADA

Pour apporter une contribution utile à l’association Romain Rolland

Sachiko INOUE

Commémoration du 50<sup>e</sup> anniversaire de la fondation  
de l’Institut Romain Rolland :

participation à la matinée : “Lectures et Musique”

Machiko MURATA

Activités de l’Institut Romain Rolland dans le cadre  
de la catastrophe du Covid

Akio KIYOHARA

Rapport sur le monde de la lecture en 2021

Kokoro SHINOMIYA

Appel à l’arrêt immédiat du recours à la force par la Russie contre l’Ukraine